

【取組 2】人権学習教材持ち寄りワークショップ 報告

【事業目標】

本事業の趣旨にあった学習・研修活動をすでに行っている教室もある。そうした教室の教材や学習活動を持ち寄って交流し、よりよい学習・研修プログラムづくりにむすびつける。

【経過】

2021 年 8 月 22 日 第 1 回学習会 会場+オンライン 24 人

2021 年 9 月 23 日 第 2 回学習会 会場+オンライン 19 人

2021 年 10 月 24 日 第 3 回学習会 会場+オンライン 19 人

2021 年 11 月 28 日 第 4 回学習会 会場 スタッフ含め 180 人

※大阪府内の識字・日本語教室、夜間中学関係者が集う

「よみかきこうりゅうかい」にて活動の成果・報告を学習者が行う

2021 年 12 月 5 日 第 5 回学習会 会場+オンライン 20 人

2022 年 2 月 5 日 第 6 回学習会 会場+オンライン 人

※第 7 回識字・日本語学習研究集会第 3 分科会

学習会（ワークショップ）と人権学習モデル教室の実践によりブラッシュアップされた内容を取りまとめ、冊子を作成し、配布。

【報告】「識字・日本語教室の みんなで学ぶ 人権学習教材」第 1 回学習会開催

学習会「いっしょにつくろう！ 識字・日本語教室の みんなで学ぶ 人権学習教材」の第 1 回が 8 月 22 日（日）、難波市民学習センターで開催された。講師（進行役）は大阪教育大学名誉教授の森 実さん。会場参加とオンライン参加（ハイブリッド）あわせて 24 人が参加した。主催は、識字・日本語センター、識字・日本語連絡会。



この学習会は、「だい 30 かいよみかきこうりゅうかい 2019」で起こった差別事象を踏まえて、現場からできることをやっていこうと企画された取組のひとつ。第 1 回は、この事業において人権学習モデル教室となっている教室のうち加島識字学級、日之出よみかき教室（木曜日）、高砂日本語教室、住吉輪読会（土曜組）からこれまで実践してきた人権学習について報告があった。学習者を中心に据えた学習活動や、地元支部からゲストを招いての部落問題学習、新型コロナ感染拡大のために休講中の学習者の声を集めた「コロナ奮闘記」、身近な生活から人権を考える「人権カルタ」などの実践だ。

実践報告後の交流で、学習をすすめるにあたってのポイントが整理された。部落問題学習は、つい歴史からはいってしまいがちだが、いろいろな国や地域で生まれ育った人たちが参加している識字・日本語教室では、歴史よりも現状、とくにいまを生きている人の体験や思いから入り、経験を共有する学習の方が学びやすい。また、普段から関わりのある地元支部の人にきてもらい、話してもらおうと構えずに自らの経験と重ねて学習がすすめられる。日本語の読み・書き・話すことが困難な学習者にとっても、経験を通じて学習できるよう組み立てられれば、学びあえる。場合によっては、日本で生まれ育った人たちばかりの学習会よりも深く学べる。ことばの習得状況により人権学習ができるのか、できないのかなど振り回されるのはもったいないなど共有し

た。また、「日本語がまだまだこれからという人が人権学習をできるのか」という問いに対しては、「日本語のできないかわいそうな人に日本語を教えてあげる教室」をめざすのか、「ともに人権を守るために自ら立ち上がる人たちが広がるような教室」をめざすのかによっても異なるのではないかという意見も出された。

それとも関連して、アメリカのある識字教室では、「自分の語りたいことを語れるよう英語を学ぶ」という合い言葉で、移民自身が自分たちの権利獲得に向けて闘うために必要なことを学ぶ場として実践されているということも紹介された。これは、被差別部落の識字がもともと大切にしてきたことだ。今の識字・日本語教室がどのようなことを大事にしながら進めていくべきかなど、さまざまな意見が出され、活動をふりかえる機会にもなった。

【報告】「識字・日本語教室の みんなで学ぶ 人権学習教材」第2回学習会開催

第2回ワークショップは、2021年9月23日(木・祝)に、大阪市立総合生涯学習センターで行った。参加したのは、対面参加とオンライン参加をあわせて19人。自己紹介の後、前回ワークショップ以後の教室の取り組みを交流した。「しきじ・にほんごてんのうじ」をあわせて7教室から報告があった。話題として多かったのは、次のようなトピックである。



- コロナの影響がどのように出ているか。
- 前回紹介のあった「コロナ奮闘記」を教室でやってみてどうだったか。
- SNSを活用して教室を実施することにどんな長短があるか。
- 教室通信発行という報告を聞いて自分の教室でもやってみて良かったことはなにか。
- 教室での部落問題学習実施に向けてどんな準備をしているか。

他教室の取り組みや学習者の受け止めに聞くことは、それぞれの教室にとって参考になるようだ。新しい試みがあちこちの教室で始まっていることがわかる。

後半には、「文化庁 5 点セット」を活用して人権学習を進めるための方法論や教材を考えた。素材として「医療機関で治療を受ける」というシートを取り上げた。このシートを見てどう感じるかを参加者が出し合い、活用の可能性を話し合った。出された観点は次の通りである。

- 導入に聴診器をあてて診察している絵があるが、まずもってここに至るまでが大変だ。
- 自分も学習者と一緒に病院に行ったことがあるが、妊娠していると聴くこと自体も大変だった。
- 地方自治体の通訳は、命に関わる医療場面には行きにくい場合があると聞く。
- この絵は、学習の最初にはふさわしくないのではないか。
- 最後に多くの単語を学ぶことになっているけれども、結局これでは詰め込みになる。
- 「世の中、こんなもんだから仕方ない」と諦めるのではなく、変えていくという発想が大事だ。
- 「医療機関で治療を受ける」のイラストで医者が男性なのが気になった。なぜ男性なのか。
- 役所の言葉を教えるという発想に立つと知らずに同化を促す側になってしまうんじゃないか。

このようなやりとりから、「同化主義」にならないためには何が必要なのかという議論になっていった。日本社会で暮らすには日本のルールや言葉を知る必要がある。問題は、理不尽なことに出合ったときにきちんと指摘して変えていこうとできるかどうかではないか。教室としても、そういう働きかけをいっしょにできる教室であるかどうか問われている。

そのほか、「活動3—広報紙を読んでみよう」「住民としての手続きをする」なども検討して、5 点セットを組み替えて人権学習に活用する観点として、次のような流れで学習を組み立てるべきことが提案された。

- ①学習者が自分の経験や気持ちを話しやすくなる活動から始める。
- ②出てきた体験や気持ちを交流し合う。
- ③疑問に答え、的確な情報を提供する。
- ④さらに深めたり、作ったりする活動をする。
- ⑤つくったものを発表したり、世の中に提案したりする。

【報告】「識字・日本語教室のみんなで学ぶ 人権学習教材」第3回学習会開催

第3回は10月24日(日)、大阪市立生涯学習センターで開催された。参加者は、会場参加とオンライン参加あわせて19人だった。

第2回のふりかえり：自己紹介などの後、前回(第2回)のワークショップをふりかえった。第2回では、「文化庁5点セット」のなかにある「病院に行く」という資料を使った学習をしてみた。使ってみて、内容を検討した。「文化庁5点セット」は次のような組み立てになっている。



- ①「イメージをもってもらう」
⇒②「交流・体験」
⇒③「言葉をたくさん学ぶ」

これでは、学習者の経験や疑問に根ざしにくいし、結局たくさんの言葉を教え込むスタイルになりやすい。そこで、次のような組み立てにしようという話になった。

- ①「学習者が体験や経験を出しやすい学習活動をしてあれこれ出してもらおう」
⇒②「お互いの経験から確かなことや考えたい疑問をあげていく」
⇒③「学習者の疑問や思い込みを受けとめて、ぴったりの情報を提供する」

こういう組み立てに変えれば学習者の経験から出発して新しいことを学べる。

さらに③までをふまえて、次のように組めば、学習者から出発して社会に発信する学習を組みやすくなる。

- ⇒④「さらに深めたり、作品を作ったりする活動をする」
⇒⑤「つくったものを発表したり、世の中に提案したりする」

教室の交流

その後、第2回までに学んだことをどのように学級で活かしたりしているかを報告しあった。加島、浅香、日之出、高砂、住吉、堺などの教室が報告した。「コロナ奮闘記」や「レシピ集づくり」など、他教室を参考に、自分たちもやってみたという教室が出てきている。部落問題学習についても、日之出よみかき教室(木)の実戦も参考に、企画しているという教室があった。次回には、そのようすを聞けそうだ。

学習会における疑問な発言にどう対応するか？

部落問題学習を始め、人権課題について教室などで学ぶと、ほぼ必ず、「引っかかる発言」や「偏見」あるいは「差別的な意見」などが出てくる。そのままにして先に進めば、結局そういう意見が広がってしまいかねない。だから、人権学習を進めるなら、あらかじめどのような発言が出てきやすいのかを共有し、それらに対してどう対応するかを考えておく必要がある。

今回のワークショップでは、いくつかの市民意識調査の自由記述から、「市民の声」を 5 つとりあげ、そうした意見に対してどう感じるか、どこに問題や課題が潜んでいるのか、どのように対応することが求められるのか、といった点をグループに分かれて考えた。ここでとりあげた 5 つの意見とは、「寝た子を起こすな」論、被差別者責任論、自己責任論、「逆差別」論、人間本性論などである。

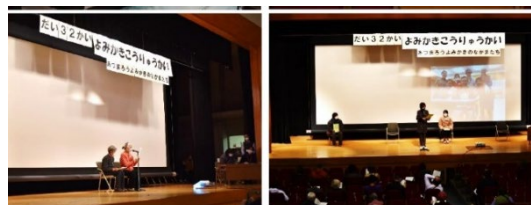
これらの意見の問題がどういう点にあるのかを踏まえつつ、どう対応するのかを整理しようとした。理論的に整理しようとしたグループもあれば、対応の仕方考えたグループもあり、議論が広がった。教員同士なら意見を交わしやすいが、ボランティア同士だと意見を出しにくく感じる面があるのではないかという発言もあった。ワークショップでは、これらの意見と合わせて、どこにどのような問題があるかを記した資料も配付された。また、いろいろな疑問を検討する学習の仕方にもいろいろあることが紹介されたあと、「引っかかる発言」に出合ったときには、少なくともすべきことがある。たとえば「〇〇という発言をしましたね」と記憶に残るよう 3 回ぐらい言う。ウワサだと思われる発言には「いつどこであったのでしょうか。5W1Hを教えてください」など事実を確かめる。こういう対応をしておけば、後につなぐことができる。

今後に向けて：よみかきこうりゅうかいとは別に第 5 回として 12 月 5 日にワークショップを持つ

【報告】「識字・日本語教室の みんなで学ぶ 人権学習教材」第 4 回開催

第 4 回の学習会は、「あつまろう よみかきのなかまたち だい 32 かい よみかきこうりゅうかい」全体会での発表として開催。当初、第 4 回の学習会をよみかきこうりゅうかい分科会で開催する予定だったが、今年度のこうりゅうかいには、新型コロナ感染予防のため、分科会開催をやめ、全体会での開催となった。そのようなことから、第 4 回の学習会は、1-3 回とは開催スタイルは異なるが、本事業の人権学習モデル教室からよみかきこうりゅうかいの全体会で活動を発表しようということになった。

人権学習モデル教室のうち、浅香識字・日本語教室、高砂日本語教室、日之出よみかき教室（木曜日）から学習者による発表（「コロナ禍での学び」（コロナを超えて））を行った。



【報告】「識字・日本語教室の みんなで学ぶ 人権学習教材」第 5 回開催

第 5 回は 12 月 5 日に大阪市立生涯学習センターで開催された。参加者は、会場参加とオンライン参加あわせて 20 人だった。

第 1 回から 4 回までのワークショップの振り返りののち、このかん各教室で実践された人権部落問題学習についての報告も行われた。ある教室では、アイスブレイクとして行った、自己紹介が思いのほか盛り上がったそうだ。その教室では、普段一人対一人での学習を中心としており、全体での学習の機会がほとんどなかったためかもしれない。普段の教室活動の時から、安心して互いのことを語り合える関係づくりをしておくことがまず大前提として必要だと感じたということなども話された。また、歴史学習など知識伝達型の学習ではなく、学習者の体験や経験を通じて人権部落問題についての学習をすすめていこうとこの



かんワークショップでも確認してきたが、つい、知識伝達型の学習方法になってしまったという報告もあった。実際、学習者の経験や体験を出してもらうまでの時間を得られず失敗だったという反省も述べられていた。

各教室で実践し、失敗と感じたことがあるとすればそれは、他の教室でも陥りやすいことでもあるので、そのことを本事業において整理していけばより実施しやすい学習活動が生まれるのではないかという確認をした。

また、来年は全国水平社ができて 100 年になる。識字・日本語教室に集う学習者、学習パートナーによる宣言を集めて、「識字・水平社 100 年宣言」を出そうという取り組みの紹介と部落問題学習として、この取り組みを実施した教室の報告も行われた。

【報告】「識字・日本語教室のみんなで学ぶ人権学習教材」第 6 回開催

学習会最終回は、2022 年 2 月 5 日、第7回識字・日本語学習研究集会 第 3 分科会にて行った。会場参加とオンライン参加合わせて 36 人であった。

人権学習モデル教室での実践を 6 教室から 10 分程度で報告してもらったのち、識字・日本語教室でどんな教室や人権学習が求められているのかを話し合った。

